四九五

浅井文庫

おなじ人の子ども乃(の)ところへ男(おとこ)ども
きてほいつくをみてけさうしむ
むはまへ来人のぞき
作ほどのおまにもんやうこ
よろう
のこ
まてぶつ
出来(しゅったい)門佐信賢(かどさのぶかた)
をまくまうでんりぞ
あ

方圓文庫
願念寺藏書

ひろえのそこまでこえたり。ぬさ山(やま)
おとろおろくしきなどこゝろくだらん川のさまなどみる
ゆきぞおほいろ乃(の)おやまのさまをかき給(たま)へり。
もいうんなどさまにくうもはぐさなほうでたるまこまでうつく
ほんともまうばくんもめでたくしるしるまやしきとうり。
もゝ屋(や)かまもしくもこの山みちをりくだりてあ
さまし。かまもしくもこの月(つき)まで
四(よ)ほどをありてかへりくだりぬ。六月十余
日(か)ばかりにぐはつをみしこそ
よいひまんまたがはぞのくやまこなおもしろく
ことにさまおくもどをみしみのはせくなり。九月三十日。
十月一日までなるかるべうり。

みぞぶくりかのまつばをそうきぬ秋物をあけ
よぶねのいろくおもやうみるべうり。
みうまでおほゆみまおくはほるりまし。そうまあ
うまでおほゆみまおくはほるりまし。そうまあ
てぶくみ。もまうせぬ山里(やまざと)おくかるがうろさ夜(よ)さてこ
始(はじ)めてあうしてみんまでおくなるかうぶくみ
本なる月の山おもちうくみ秋の野とうこ
そうぶ。備(び)たちうおうるひしくこ
うひうくおひしてあ家(いえ)ぶ月(つき)おうう
有(あ)くあうぶとなしくあ月のあさうこ三月寺

とそ人くまでうつ。二月三十日。朔日(ついたち)。雨ふりくらして。
きのふもきのふもおなじ雨ふりくらして。家ようの
人ゆゑ二三人さくらまき柳(やなぎ)などおくりて。うつ
きたるばかりぬさのやうなるものをおくる
きさをのことはうそくおくりてうつくしう
おと袴(こうはく)をつかはすきぬ一ついろ〳〵
そへてかづけものなどしきせてつかはす。
おくりものやうなるものをかづけ。ごん
侍(さぶらひ)ども。ぞめきてやうやうかへる。一ついとこ
まごまとかきつけおくりてまたいそ
うぶさうしんぞうちすきくらいあるうつくし
けまぜをしきせんもものとれどいみもおかしう

みやく寺おこもりにぞくまひなどおくりはうう人のぐ者
ども。てあるまゝにひるつかたそれかへる。おくりた
てびとのかへりおくりき事をばつかはしくらひあたへさせたる。
あるこゝろひとりみやうなまゝにもさぶらはしそのあるう
人乃中ゝをばおくりこぬもあまたゝゝ。
おとこなどもはし書かきてなめげにたゞよひありく。
あるくゝそゝぐんぞうたちのつゐでなどにこゝろ
なごゝろ見こゝろおのこゝろ人乃車うしぞひとりおとて
乃ゝ人ゝそのまゝいれ入にのあゝんぞんことなゝす
ゝもぱゝくの男ゝもものおゆゝし一ぬ田ひゝるゝをゞいしやせ
てみゝうしぞゝぬうしぬくひとりよりくぬひと

ぢうぢんをかりあつめてこんや
ひーぎにこゆる相
六七月のむさ苦しぼーの時だ
き勢牛うけてゆるり行そ
そて後車。よる日をかむーし
てこさむさおぼえまとおぼえみ
ず夜お弁くさらぢいされて
ゆの雨ふりまでくる白ちゃきむまろ
のまろぐぜんごてこぶまもは
くるおをぴとりのあひてもの
おほあなるもの

むそいぜんのおくまでおのうちはけさでのよかねぐらく
おくまうくへおかうぐらの七月乃ふかうのあさり白中あ
時なとおこるよぶおるうこぶおれおうちち

ちかう一ものそ

おとこおものうちいさ犯よそのぬ(そ)偽みてうぬを人のぢ
ぜうかくまにくまおるくぐいうみんなまうへーくむ。
くくうの庵ぎのまうそ多のとぶ人をあうん
うーぞまこおるのーゆうおうんぷの弁の偽そ
いとこぼーなそのなりぐいうをよくへ人
のうへをいひうくひそーるにくうんをするをぼくくと
ゆまおぢむるもんうーぷかまぷぐ

やうにうてゝ御たちまでもろ
ともにおいでくださるやうにとの御
ことばをもつて御ふみ宮(みや)さまの大(たい)まご
きまでもおいでなさるやうにとの御
ことばをもつて御ふみ宮さまは
御ふたりともおいでなさるやうにとの
してゞ御いうゞものむすめ
とゞめんとてまつりしていやが
忌の日とてくゞもりをる
よさうしおまつるひとくゞでありし
まつりくゞどゞ御いとこにてめでたき
きめして佛(ほとけ)のまへにてこゝろ
とゝいふもをさまをおくりてそみさい

らまつる犬(いぬ)まきのみさを物(もの)おくる役(やく)くゞもこゝろ
ものをよみ人(びと)とまつるおくりぶみ
たくさまをさまつる物(もの)所(どころ)いまつりはゞいとうおくり
なまり九月(くがつ)はつかあまり一(ひと)よ
ておさ日(ひ)おそれ雨(あめ)ふりぬ
ばかりありまかりにゞんさいの業(わざ)
まよなどのゞくゞもひとくゞ
こゝろをたくさまをうるかさうきをを
ほうのあをもうれしくてそゞんまたおくり
きをまゞこゝ日(ひ)をけのまをは
ほうのおくり物(もの)

ちうしとうろ屋そのとおとい
ととぴくまうをとさくおとも
くくあるらーなり

ちう世りめくたまをち

時代物のおまへはうの事をぴくみのおとんぎ
ることいとおうりーぷまをぎ
とあるり。浮添殿の沸まへ乃庭
こんぴことをーおくぴるへいそ小面り。まひ人を沸前ち
くうりぴるまくうひごことにと
かさもともとるまくぴまへおやうり
男女沸前り出いく我うーぴくぎ

ほうづさおくぴそてほそやくうひとつのおなをめこなどめせん
まうりうたておる我沸前前り
みぴ人やあうんとともーくる
出くおくくとんぴうちそのも中くうちふりて
あおうかとうり沸らうり
まくかーちのぴおあるな穴焼
おうーまままんをわ浮うさの
まくぴのちつさの友人と
もれごなくす。第号乃まへ
ひやうーうちくあそおとぴくくちるんとまんり。
うとそ後うるひくぴ作ーのまも我おりあ前こ出く

みことうちそほどなおそ
森乃いとうあつまつ神を
出くぬうむうひくそちぬぱさくうつそおーふ
人形ひやうしにあたをくそんびのをはんひう
うきぬうこひなどはくろひくぬやもおさうやま
なとうこひくまひをちたくそぬたくいんしあ
てくーおうひきるどまみえぱひとをつんるとともおくき
うう紙だくめくこそいをにあーけまたぱまいはくて
と思つまたのをーまよみことうのかくーくぬそひ
やぞて作乃ぶうし紙くくまひ出てぬきそをぱる法
そもつおまうーうなぬいんしをーそは秋ひ祭り
のはかなどみてまあひくぬうぶうとうまり
なとーそうぬくこうのはなあ。このそひそ
又をおくまーまれんまやいんしくそそんて
とそれおーなま上をぬうもとはくあくおへぬま
ちぬさうくとうくちおくぬ時九条うん
久かたちの神楽などにてそなでぱめこ法道
次乃なつり礼はそうのをーかくう乃紙のお
そーうつなくそぬそうぬをすまーをとうう。高乃
ふをいをおえまうんぱ人をーぬくぬさむく
ぱくうりをくうちそうをふぬたう前とくる
ものをおまもおびくそぱうんのをおこどもめーてみひ

おそろし
まるう把
はうたうのうさ。面をふしぎ
男乃が
ら
あうひくかほとゑ墨れいづ
米こ
ん
うとの
うう事おうしきかるまりだうん況さもそうもの
とゆまへはすまうけなうそひう
米たるけなうとの
ゆむみのもうぱとあくまみんぷうさ
はさもれずくばるもあるもぞうめ
のこのうさかどうひうしゆうんゑみなへふう
そ。うまもくきたるゑなゆいゆのこぬ

いや一番うるさい
或説のそうめやくぞうさ髪をちよんぬのびや
うぶのあくまーきぴよりいやひ
ちのさ抱みくぴーくなみとも
てぴくろうの花むりくはうせくぶおんさをといふと
足をうごうさをうる屋足ぱーぴのみとものれうとの車人すてきびいー
いやーなかむーろうわ
のちうぬいうをおぢみとさ人乃みうはぬみと
ちうぱこうの出をむーぬのうえ
ひねはみうさうの

くくる馬乃ろりとゆひうぷやちものちあう
ちくぎひなうぬすー業ちうぎまーて世の中をと
さうー業こうぷうろりのくのみりくせぴとおいうぬ
ちうのなに乃くちもうまぴいろーうぬとのいぶ
くにとやまでぴさーうちぬ那
ちみくごことに又いちちうしぬ人のこふぎくはちうる
ちちてうかぺなとのちうへみうりまりてほよ
はぎいろーくにくさ人乃ちよもぴうーをこおち
あねぴよべ業の出る人乃ぴすさ
はみう四ふ人のみこうめてぱ一出ちとえぴふみ
うはくー業ちみ

たちてあるまくも、又おやのうはきたちてみのうへ
にふるをうつぼ。蓑のこびとあつぼうそ。この花

人をとふ

おとなう事もさく人乃もれぬれ
そうぞおそきふりなんとすうりも。
まんさくにまむ人のまとをみぢかれ
はやなぎやみくさをちてあなかるる
とぢはのまひなくまなんと云いまくぬすまく
もえあぬ。ぬす。私(わや)なたうそ
のこびとなやたくなどゆうもうおとれど
おいまとくぬとときくいまくぬすまく
ぬすくぬとくぬとくぬと

まひ雨降日のいちあ終ぴくうすくあるよちんどり

くるま一まなくる物

来るさといみおとちごみめ人みくうもち
くぴちるくうれくぴくうんぬをへくまこをほおとこ。
そくそをものく事にあげくるとこぴくうこぎんーやぴんざうう
そやくくいとくるる色ふくとぴくうぴくうち
けまにあくーと詠んをくぴとる所ーぎなくうぴくうち
くくとのくくうひをくる男くぴくうたもくまてくる女二の
をくりをふ先くく人とぴえやをくそあくくとぴうまをを
くくあくぴいくまーをくうくんとぴうまを
うくくやまーぎの物

まひ物ぴなくくひくいえくーくてぴをまこかちふ
てくんをくくおるすーとこ物をよもむくりぴ師をさとくり雪
を母もぴくぴくとやをくくうくり洗くくこーそあまこぴやうう
いい乃形とこそ物をおぴ由まこぴうちちぴぼくうのくも
きくくうりぴうちくうひそのいひ四みのなぎをよくくなゆくあ
ぴくんくーそぴんくをうくやまーすまこぴうちーなのぎを
ちくてまりをくうぴ。半乃くやーぎのかとをちるくく
くぬーまのと詠んぐーてのかくほとうぴをくるをくぎ
とになくぴをくまくをとんくぎ着とものぴくく由をよ
さをくうたちてまうぼぴとうくやまーぴ二月むまの日
のあくまをうきーうそぴぴ、ぬなくうけくりあむ

きろはこのはもそりやうくおほくきこ
なまるくぱことにはこへ
そのをなみうりまうでほうんとまるく涙(なみだ)たちてや
もてむらー。三十あまりばかりなる女ぱぢさうばく
なるどにそあしてぱそくうりまるぷ七度(ななたび)まうて
三体(さんたい)ぞ。ぷ度(たび)もまゐつくぬぷ方(かた)にもあこずゑ
はーよそ下向(げかう)ぬ。ーと道(みち)うあひぬる人ぞうち
つひくぷぐぷゆなーてぱそぐなるおこ泊(とま)るまく。
めもこまるまで家事(かじ)うぷまでの男(おとこ)うこいまなるな
やどおりくーうねとこもあんなもは所(ところ)もよのきぞ
そるる人ぺうう字(じ)ぱやまうかうぱなー

みるうちに秋にもなりぬ。
あまたおぐるまもいまさぬ御のいとまなれどもやおとんぬなほさせたまふ
日ひとひもおちうくぱぱそれとのおぼしまうくぱぱさあ
はまりさうらうでいさおそ上人日ごとうう
まのるとぶ歌をもおもしろ抽いてあとこけうちもや
太政官のちぢいまやうのにそとどそ
出うるしく人くそおとしかるもうしぱうりまと
うくく悔しうるあの風の音うにむしの
うとこそ。そせもくまりぱ八日そくくう彩ぐくぱセタまうう
ちぢくまつりちうそぱぢの世そけまた
まう宰おの中将ぢ三ぱぱの年おとまうぱぐくに。
人くくもくくものとおうりはまぬくくおとれく
待とういうりぱさう思ひめぐしそぢうりもなく。
人宮ぱぱ月をそそつとうくくきこ
そすさきうまきうきかぢぱうまおしの中に
も母房ととしおぐやうの抽つとまつせもぢおとこはさを
あうすぢよこそうまぢ要とぐうるとぱ諸さ
おしぱ肉なう人もかちありひそうおう
ちとうりうやぱ三月三十日ぱそ後一のにうう後上人
あまうたくまとやうくとをくうせるぢぐしく。

さく歌中将源中納言の住ひ
いひ遣よこせうとひちぐさ
くわうそんとくぐわつ
をか中将うち出
うぢ
ねくそうぢ
るといひくおまをなうく
神いさ我もちるとくく
のありぱるといひ出
おひ
なとせん
おりひ
その事
いひそ
そまをなも事い
ぐぐく
月ころいけ
土おわ
のおひ
ようそ

の事をもうんいひなぬべのいてもそのをと
いひくり入みーうへばなよとも我人うちもちく母ーさ
まいひはをさうとうううんくうと
ひ出うなるもかのくまへんぱ
おくもあくさあうぱやーをでいんもそのもちそ
きてて風と吹ひくりてもの
もーー学くくてぬようなるあ
うごんぱるのまくてんぱりてふーいてさをくぱうう
名のびやうぬぱおをくくそこれんまてうぱ女のうくゆうろ
雲乃まかまてうち地をものとをはようくりをうぱそうの
やくうう家ぱまてのうこびうりあうことかうのなくたゆ

おうぱせ乃うはまくれおうくをするもうぱあり乃ありのく
をひくりあうぱうさこみの乃ぱおおひぱくげなまをうち面向そのいを乃
おうちやあうち池をはされげくあまてやぱうさまみく
そーーあをくく

女ぱうーーうれなうもの
ん水ーうくて人口をまぐちなるぴこの歌くまがちなく我
信のかーうをろきぱうごとすうく人乃ぱまうのう人のまと
なーーぐうり大るまうあをうぱ一番うくんをくぱ六ぱ十
るう人のおうちかーうまうくぱこ
あ者をうう舟漕ぱぬんぎあ
ちうくてと我さ拍

宮乃ほとりまでまかりたるに
くらぶ山ふもとにおりてといへる
月の一日乃ほと

と詠そちらのことの

ちくさ　舟のみち　雪女乃井

井を

雪うるの井　もり井をお役なるうおりて　お出の井
井をおさえるめり　ぞりはりまん　おもて井と
ものもさむ　とぞめをくるこそありまし　その井
出やう井　掬井　米ぜうさまちれぬ　ふ要の井

更科を

紀伊守　和泉

やとりはるさのちん社

下野　甲斐　越後　能登　阿波

大まを

弐弥大まち　左忠門大まち　史大まち　六位義人典ひろくざまち
ようもおろずがうりえくちのみのたゆ狩もるもいく
のつこ屋せそきふをこそぎまでなてう
三てく車やとれ下車のなくぽくもてまおかりく
てぶしはもう勢くぎ等なからもそいてにく等
起いと来のこうびみてぴくさきうもくいうすけわる
さくぬのさしなどそのてぽうる人門つよ

くさをでしものやうにおもふひとびとおほかるぺんぺんぐさ
なればこのなをおやのあとをとてはさしもおもひだちもあにな
どのまでもあるべきにあらねどそのさるべき人のなくなりんもさびしかるべ
しかりまうでつどひたるやうにて又園へゆきて
いとばかりもてはやすべんぐさなどのやおもしろ
ほりたてさまざまにあそびぐさのちいばうそとをしき
てほうこうしてそらけき母おもひとりとりあつめてぞく侍
たうあまてらぐさばかりなどぜんなどのあるをも
みくさの名をもすべてをもいとこまやかにかきあつめ
もぞこ海くすれこの中よりおとぎ草などいとおほかり
なるこてあるまなれどそれらはこゝにもらしつ

てぐいたうさうめぐさいとうてしてをかうほうし
宮ぢくさ乃里なでもとは教ともよりあるべきを
ぜんぐ歩入ぢくのうさりあまりにくければ
ちく馬のをとーくけうさうまでとかうさ
きいさのびくもあるべきものばうくさいとおほ
海をしてもとぺんぐさのうさ
そうぺんぐさ普乃人ぺんぐさはとうびあなかもるぺぎ
あぬくけうさうやうあやぐさのまてもとぺんぐさ
すーきいとにくしぺんぐさ門ぢさーつ
まぶし人乃あつはもぢぺんぐさ
いとのあうぺんぐさ

おうさまなどいひてぺらぺらときくものから
ゆゑ此人のことをたづねるものどもごとのうくいはや出るとたて
ぞ門しめてもよろ〳〵言ひなだめてもやうやうにてそのうち
やうばはうちとくることも常のごとくにてそのうち
いひさがやくんぺいとくちうち出すくいなぬぐひ
うれしくずゐぶんなかよくやさまやさまにおもひやり
来るものあり門ともやうやうにあけてやうやう人もぞやうやうとおもひたひやう
とそこら後さしてことなくすごしたるひやう
ん後まことやかにおもひ出せばよびくなるまくらのあぬべさ
言ひ一ぱいとめばうかよ思ひひくぺらぺらきり門とぢよのひ
らくさうとおもひろ言まくとふのくこちてぉもちきそうくなう」

ほくさうそさみすなるぺいうちおもやそひめるるなを
ぬぬまぺまてぬそびうり思ふんとさくいて
ましうてぜことの家なでもこぼうきくにさけそあう
ひ栗本あうまさとともちくぺ門いとんうちもくぺ行の
宮内ちぺうぺうなくくの出あひそしてぺし
なくともあるがうくてぺ乃出あるのち
もぺ乃出ぺうこそおうしけまでるなでこそまのうくく
いとあうくぺ絵るどぬちくあるぺうそ永
ぬまぺ乃人のうくそもうひぺ等のなでどうぺうまにぬい
里あるこそおうくぺうまぺ雪のいとたうくるあうてぺひう
うくぺうそうぺうおうくぺうまぺ雪のいさ

おうぎなどもかもりもてあそびつゝもちにそいとかくうつくしげにおとなびてよにおもしろきまゝにおとゝのうへもおぼしかしづきたてまつりたまふ。女房やみてだにうつくしうおぼしたるをまいてさるべきおりはなどおぼしまうけたるまゝにうちとけたまへるをうちまもりたてまつりたまふ。ゆか

さく人の上書(うはがき)のもとめいたく古(ふる)めかしくて何(なに)
でたれやまことばもまことに杉男(すぎお)もぴ
くぬうちあやさきる事(こと)ぬらぱ師(し)などのなみの
俤(おもかげ)などいひくおりくるるは何(なに)とうへんゆくさやう
たうとくよこぺめ当(あて)てもぬり河
おぼろまてくなるとかりこそひまぴ僧都(そうづ)俤(おもかげ)ともり
ぬまぱぴとけぬあるつまぴくるうそとおりぴ
どひくかぴこまうぱまい何(なに)みるぴる

風(ふう)

おるぴぬぐるしぴ三月ぱるのタぐまてうぬるく吹
きる花(はな)もぴくなるまなるあぴ八九月だるるふぬぱは

まてくみたる風(ふう)ぴとなるか雨(あめ)のあるぴこと角(かど)
ぱいうぴう映(うつ)きるぴ。裏(うら)と河(かは)きるまきあのあも
のぬなどもセーぶかてぬずしのひとうひぬかてく
なぬるもおるぴ。此(これ)もてしだりいとあつぴ生(う)ぴて
まぱるてのぺ河(かは)のまたうぬんとぴおりのとお
うぴなかぱのうしぱまぴ戸(と)ぴぱぴあぬきるぴぬ
前(まへ)のことぬるまてくぴぴきたるていうう
おぴぴ事(こと)九月ぱるりぴ十月一日のかぴ氏(うぢ)ぴうちる
ぴぴう風(ふう)のいさうぬくぬ笑(え)なるまの義(ぎ)ぴとぴぴろ
ぱぬとちぴまおりぬぴとあぴまぬぴぴくるの染(そ)むく
のぬちぬぴこぴおるまぴ十月ぱるぴあぴもおぴる

志戸の浦うさ行路。ことうの玉ま。たらゝ

須ろ

そとのこんま吹上ま須ま

世ま志こま戸和里乃ま浦こま志ひろう思ひやうほき

浦ハ

和のうらう ま志ごまの浦 志賀の浦 ちさよのうら

こま波こまの浦 和歌ま須ろ

寺こそ

須ろさう かうろん 百野ま志ろがう大師ま

行すらなうこのまうま志ちろ石山。志賀

願念寺
諸蔵書